

# 大学の実習が参加者の海洋リテラシーに与える影響について

0714029 田中利憲 (海洋スポーツ健康科学研究室)

## I. 目的および方法

乗船漁業実習及び海洋リテラシー学実習が参加者の海洋リテラシーにどのような変化をもたらしたのか分析し、実習の効果を検証することを目的とする。そのため、本研究では乗船漁業実習Ⅲの参加者 24 名と水圏環境リテラシー学実習に参加した 34 名の計 58 名を対象者として、海洋リテラシーを構成すると考えられる 97 項目について質問紙を用いた調査を実施した。それぞれの質問に対して 6 段階で参加者に自己評価してもらい自記式質問形式を用いた。調査は実習前、実習後、実習 2 ヶ月後に実施した。統計処理に際しては、SPSS11.0J を用い、危険率 5%未満の場合に有意差があると判断した。

## II. 結果

### 1. 乗船漁業実習Ⅲについて

一元配置分散分析の結果、「航海技術がある」に有意差が認められ、乗船中に値が向上し、2 ヶ月後まで向上が維持された。この他、実習前後での比較では、「持続可能な海洋のための行動について説明出来る」「海は大きいが限界があると思う」の 2 項目で向上が認められた。

### 2. 水圏環境リテラシー学実習について

同様に一元配置分散分析を行ったところ、「海の大きさについて説明できる」「海の大切さについて説明できる」をはじめとして、34 項目に有意差が認められた。これら全ての項目において、実習前後における向上が認められ、2 ヶ月後まで効果が維持されていた。

### 3. 乗船漁業実習Ⅲと水圏環境リテラシー学実習の比較

乗船漁業実習Ⅲと水圏環境リテラシー学実習参加者の実習参加前における海洋リテラシーを構成すると考えられる各項目について 2 群間の平均値を比較した結果、「航海技術がある」「船に関して説明できる」「海難に関して説明できる」など 17 項目において乗船漁業実習Ⅲの参加者が高い値を示した。

## III. 考察

「航海技術がある」について、乗船漁業実習では唯一の変化が認められた項目であったことに対し、水圏環境リテラシー学実習においては評価の低い項目となった。乗船漁業実習は航海技術を身につけることにおいては効果が認められると考えられる。一方、水圏環境リテラシー学実習では、多くの項目において向上が認められた。2 つの実習について実習前の平均値について 17 項目に差が見られるなど、本学の高学年者は低学年者よりも海洋リテラシーが高いことが推察された。水圏環境リテラシー学実習は、専門科目を学んでいない段階の低学年者においては極めて教育効果が高いものであると考えられた。

## IV. 参考文献

千足耕一・佐々木剛：「海洋教育者を対象とした海洋リテラシーに関する調査研究」, 日本野外教育学会第 13 回大会, 山梨市 (山梨大学), 2010 年 6 月